

時論



みずほりサーチ&テクノロジーズ
理事長
中尾 武彦

技術進歩と人間

長引くコロナ禍の中で、オンラインの活用が飛躍的に広がった。社内や取引先との会議、各種セミナー、大学の授業などが画像付きのオンラインシステムで行われるようになってきている。数十人が集まって資本主義の未来について話すような国際的なシンポジウムなども、米国の早朝、欧州の午後、日本の夜にしばしば行われる。以前のようなリアルでの開催に比べると、時間も費用も格段に節約になる。世界の人々がじかに意見を交換する機会は、確実に増えている。

秋学期と春学期にそれぞれ別の大学院で、留学生を中心とする10人程度に対し、英語でのクラスを受け持っている。今年の春学期の最初は、大教室でマスク着用という条件の下、オンサイト（対面）の授業も試してみたが、顔がよく見えない

し、声もよく聞こえない。オンラインの方が、双方向の意見交換はむしろ活発になる面があることを認識させられた。

1990年代以降のデジタル技術やオンラインサービスの発達は目覚ましく、人々の生活、社会、経済を当初想定された以上の速度で変えている。私自身、メールと添付機能、検索エンジン、Eコマース、スマートフォン、オンデマンドのソフトがない世界は、今や想像もできない。消費者がこれらのサービスに価格以上の大きな価値を見いだしていることは、経済学者の研究でも明らかだ。

最近気が付いたことの一つが、オンラインの発達によって、文化が時間や空間を超えて広がっていくことだ。マニラでインターナショナルスクールに通っていた息子たちは、海外の友人とよくオンラインで話をしている。友人の一人は、80年代の和製ポピュラー音楽の大ファンらしい。グローバル化の進展で英語圏の影響が強まる傾向がある半面、これまで外国では知られなかった各国の文化が再発見される可能性は高まっている。

しかし、オンラインでのコミュニケーションには、もちろん限界もある。その人がどんな気持ちで発言しているのか、本当に喜んでいいのか、そう振る舞っているだけなのかは、3次元で同じ空間を共有しないとなかなか分からない。コンサートへの熱狂を見てみると、出演者とそこに集う人々の共感の大切さを思う。大きな会議や教室での講義は、その前後の雑談や廊下で呼び止めての話の方が大事なくらいだ。

人類は、対面の口頭でのコミュニケーションから、文字、手紙、活字、電信、電話、ラジオやテレビ、インターネットと手段を増やしてきた。進歩と同時に失われたものもあるはずだ。文字以前の社会の長老なら、口伝だからこそ真の物語を残すことができるかと嘆いたに違いない。社会の中で研究開発に従事する人のシニアが高まっていることもあって、技術進歩のスピードは加速している。森を歩いて採集生活をしてきた生物としての人間のスペックは、どこまでこのような技術的な変化に付いていけるのだろうか。そもそも人間性とは何なのか。そんなことを考えさせられる。

コロナ禍がいずれ収まったときに、われわれは技術活用の新次元に立ちつつ、人間にとってのリアルの意味にあらためて目覚め、それを取り返そうとするのだろうか。私はそうあってほしいと思う。